

戦
争
の
記
憶

記事にならなかった戦争秘話

玉井 正(八)

(1) 陸軍病院の閉鎖

陸軍病院とは、軍直轄部隊で、常時数千の患者を収容し、内地帰還と戦線復帰の分岐点であった。私はインパール作戦で負傷し、サイゴン陸軍病院に入院、療養中の出来事である。昭和十九年七月インパール作戦に破れた大本営は、名譽挽回とビルマ奪還を謀り、病院を閉鎖し、入院中の患者を再び戦線に送ったのである。

昭和十九年暮れ、病院長は、担送患者を除く、全員に集合を命じ、「レイテには米軍が上陸し、ビルマには

英印軍が降下し、内地からの補充は一兵もない、現兵力を以て、ビルマ奪還作戦を敢行することになった。

諸君は直ちに元隊に復帰し、片手の者は手一本の、片足の者は足一本の、ご奉行をしてくれ」と涙ながらの訓示があった。片手を首に吊る者、松葉杖の者、いたいたしくも、哀れな姿で、サイゴンを後にしたのである。十分歩き、五分休憩、行軍は遅々として進まず、

バンコクまで数か月を要した。バンコク兵たん病院の軍医は、この状態をみて、銃を持ってない者が戦線へ行っても、ご奉行は出来ない。かえって足手まといになる。只今から軍医が診断をする。元隊復帰可能と認めた者は戦線へ、他の者は今暫く、バンコクで養生した方がよいと思う。この処置は軍医の独断である、異議ある者は申し出よ。ほとんどの者は異議を申し出て、戦線復帰の一日も遅いことを願ったのである。元気な者は、戦線に近い部隊から、敗走中の元隊に追及したが、一人として生還した者はなかった。私は元隊がカシオニアに、転進中であつたため、バンコクに残り、

前線へ物資輸送に従事中終戦となり、万死に一生を得たのである。戦況不利といえども、病人を戦線に送った、大本営の処置は、日本建軍七十八年の軍史になく、後世の批判を仰ぐべく、あえて記事とした次第である。

(2) 捕虜が再び捕虜に

終戦後、私の部隊はブノンペンに集結した。武装解除を受けた後、昭和二十年末から、乗船地サイゴンまで、行軍による移動を、開始したのである。酷暑のため、早朝二十キロを目標に、サイゴンまでの、キロポストを数えながらの行軍であった。ある日、安南独立義勇軍と称する部隊に包囲され、再び捕虜となった。筆談により、「盟邦破れたりと言えども、我々は祖国独立のため、最後の一兵まで、戦う決意である。応援してくれ」とのことであった。これを聞いた部隊長は、戦いに破れたりと言えども、大元帥陛下の命により、行動しているのです、ご意思に添うことは出来ぬと断った。では致し方ない、携行の小銃は、全部頂きますと、没収された。小銃は警備のため、三十人に一銃の割り

で、借用したものである。数日の後サイゴン街道まで案内してくれた。再捕虜中は、取り扱いも丁重で、給与もよかった。それもそのはず、義勇軍と称する部隊は、某憲兵大尉が指揮をとり、主力は日本軍の逃亡兵であった。

(3) 捕虜が討伐戦に参加

反乱軍の妨害が激しく、前途行軍不能の状態となった。英印軍は武装解除した兵器を、再び捕虜に貸与し、反乱軍の討伐を、命じたのである。命を受けた大隊長は、部下全員を、内地に復員させたい一念から、偽装戦闘を計画したのである。目的地に到着するや、部下一名を従え、敵陣に突入、反乱軍指揮者と面接、討伐戦について、細部の打合せをしたのである。

督戦英軍将校の眼前において、攻撃命令は下され、敵陣地を占領、偽装作戦は見事成功したのである。双方に損害なく、借用の兵器は、全部反乱軍に献上し、丸腰で悠々引き上げたのである。その後大隊長は反乱軍に走り、数千の部下を指揮し、ゲリラ戦に活躍中

あったが、停戦協定締結により、任務終了、司令官の許可を得て、全員元隊に復帰、内地に帰還できたのである。青年大隊長のとった、応変の処置に、敬意を表すると共に、今尚大分県にご健在の、隊長の長寿を祈る者である。

(薪 在住)

戦争中本当にあったこと

坂本好子(六五)

思い出せば、昭和二十年五月の終り頃、お茶つみの最中私は二十歳で友達や、お姉さんと、草内の木津川のほとりで、お茶をつんでおりました。その時空襲のサイレンが鳴りひびきました。それから五分もたたない内にB29が三機ずつ編隊を組んで九機とんで来ました。その中の一機が煙をふいています。

日本の艦載機が煙をふいた一機を追いかけるようにとんでいます。村の上で落ちるか木津川の上へ落ちるか、わかりません。誰もお茶をつんでいる人はありません。皆んな無言で、こものはっている茶園の中で右

往左往往しています。ごうごうと腹の底をえぐるような爆音がだんだん高くなって来ます。私はちよつと空を見ました。煙のふいている、飛行機からパッパッと4つ白いキャラメルのような物が落ちました。それから、あまりのごう音で何もわかりません。これで私もB29の飛行機の下じきになり死んで行くのだと思いました。後は、なむあみだ仏、なむあみだ仏と言いがら、お茶の木にしがみついていた。その時、雷が百も落ちたかと思った。「ずうーどーん」と地ひびきがして、百米ほど先でB29が木津川の川原の上へ落ちました。目の前で見えたあの時の砂と火煙、天高く舞上りました。私は一生忘れることが出来ません。私は茶園の中から、先のキャラメルは、何だったんだろうと思って堤防の方を見ました、それは落下傘で、アメリカの兵隊さんが、カジを取りながらゆつくりと堤防の上へ降りてこられました。私はこわかった。もう二人三人堤防に誰かがいました。私もお姉さんもお友達もいっしょに見に行きました。その時兵隊さんは

ピストルを、私達にむけました。こわかった。こわかった。ピストルの色は油じんだコイ栗色でした。初めて見たアメリカの飛行士のお方は七十歳のおじいさんと思いましたが私は知らなんだ。そのお方は金髪でした。二十歳くらいの方だったそうです。こんな戦争の想い出があります。けれどあまり誰にも言いたくなかった。自分の心の底にしまっておりました。けれどあれから四十六年が過ぎ平和になってもう昔のおとき話として書くかと思いました。

今私の家の近くに同志社の下宿があります。そこで日本の青年とアメリカの青年が仲よく遊んだり、勉強したりしておられます。今思い出せば私達の二十歳の時は地獄のどん底でした。もう二度と戦争はこりごりでございます。いつまでも、いつまでも平和でありますようにお願い致します。世界の人々と手を取り合って仲よく暮らして行きたいと思っています。

(草内在住)

戦さを越えるもの

家 村 禎 三 (七二)

その日は折り悪しく時化のあとで、波は高く、私の乗っている船は、激しく波にもまれながら、日本海を時速十二ノットで北上していた。ふと眼をさました私に、船窓から外を見ると、夜中だというのに、いつになく無線室が明るくて、ざわめいている。耳を傾けて聞いてみると、盛に「SOS」を打って来ているところだった。このニュースは、ただちに船内に伝わり、オール・スタンバイの命令が船長から出た。

遭難船は『気比丸』という名の船で、日本と朝鮮との定期船である。その船から「触雷したから、すぐ助

けに来てくれ」という無電なのだ。私たちの船から遭難地点まで約六十マイルの距離がある。時間にして五時間かかる。

現場に到着した時は、未だ夜も明けやらず発見は困難であった。日本海の冬は初冬でもかなり寒い。全員が冬支度をして、甲板に目白押しに並んで探索に努めているうちに、夜は白々と明けて、水平線が肉眼でも見えるようになった。見張役の水夫が、マストの見張台にあがった。それから一時間程も経過したであろうか、突然、見張りの水夫が大声を出して、水平線を指さした。「ボート発見、右舷十度の方角。四隻のボートが互いに継ぎ合っています。手旗を振っています」歓声が、どつと甲板上に流れた。

私たちの船は、あらん限りの音で汽笛を鳴らして、確認したことを相手のボートに知らせた。海上遭難の一番ドラマチックな時である。海員学校を出て、未だ間のなかった私は、もうこの感動で泣いてしまった。高波からボートを庇うようにして救助が始まった。

舷側にロープを何本もたらし、ひとりで上られる者は、それをよじ登らせた。が、ほとんどの者は、体力も気力も失っていて、私たちが一人一人を引き上げなければならなかった。ボートの中の浸水は激しく、まるで湯槽の中に、着のみ着のままでつかっているようであった。ボートの中の人はずべて顔色が青い。そして体は電流を通されたように、大きくふるえていた。

母親に抱かれて、死んだようになっていた幼い子供もいた。乳呑児もいた。助けあげてみると、既に死んでしまっている子供もいた。それだけでは無い。寒い一夜を海上で、恐怖と不安に襲われながら過して、今、救われるというその時になって、海中に没した人もいた。

一発の機雷が、無防備な商船を撃沈させ、罪のない非戦闘員が、生地獄の中で、一蓮托生の惨劇の真只中へほうり出されているのである。十八歳の多感な少年であった私は、一人一人助け上げながら泣き続けた。涙は茫沱と頬を伝っていた。救助が終わってから、軍から緘口令が出た。これで遭難の大悲劇は葬られた。気

比丸のこの遭難は、戦後、世界海難史の中に、その一駒として載せられた。

タイタニック号にも劣らぬ死者を出しているのである。四百名を越える船客の半数が、帰らぬ人となった。船には国籍の異なる人もいた。しかしこれらの人たちは、互いに国籍や国境を越えて助け合い、励まし合って救助を待ったのである。

それから五十年がすぎて、私は今、老人ホームで安楽に余生をすごさせて貰っている。しかし、そんな私にも「運命共同体」などという、不気味な言葉がはいって来るのだ。第一次大戦後、今日に至るまで、未だに真の平和は何処の国にも来ていない。衣の下縫いが見える政治は腐敗している。「核」の恐怖は私たちから去ってはいかない。気比丸が触雷したように、私たちの頭上にもっと怖いものが降りかかって来るかも知れない。多くの人を死に至らしめた気比丸は、今日の私たちに何かを語ってはいないだろうか。

(大住在住)

B 29が飯岡村上空で撃墜されたこと

米 田 修 藏 (七三)

昭和二十年六月五日午前八時三十分頃、大阪の上空からブーンという爆音が聞こえてきた。戦争も激しくなり敵機襲来もおかしくない情勢下にあったので、空襲が始まったのかなと心の引き緊まる思いであった。小高い丘の飯岡からは、家にさえざられ余程上空にさしかからないと、飛行機の姿を見ることができない。私は爆音の聞こえてくる方向に、ジーンと耳をすましている。編隊のB 29が西の上空に姿を見せたのである。高度一万五千米の高さで同じ速度でゆっくりと飛ぶB 29は雄大である。私はもしここで一発の爆弾が、この

村へ落とされたらと思うと身の毛もよだつ恐怖心におそわれた。すると、どこからともなく日本の戦闘機二機が姿を見せ、B 29めがけて突進して行ったのである。B 29とくらべるとまるで米粒のような日本の戦闘機を見て思わず胸に熱いものがこみ上げて来た。日本の戦闘機は互いに示し合わせたようにB 29一機を目標に集中攻撃を加えにかかったのである。それも米粒のような日本の戦闘機がB 29の巨大な編隊の合間を縫うように、健気にも上か下へ、下から上へと急旋回し、前後左右を問わずB 29めがけて撃ちまくった。しばらく見ているとB 29の一機からパット黒い煙をはいたのである。私は思わずやったと思ったが、そのB 29は編隊からそれることもなく煙をはきながら、ゆうゆうと飛行を続けた。日本の戦闘機はこれをみて、これでもかとB 29に向って撃ちまくった。そのかいあって遂にB 29一機は編隊飛行を断念し編隊から外れて下降し始めた。日本の戦闘機は煙をはいたB 29を尚も執拗に追いつつも先の編隊が気になるのか、B 29一機の煙の大きな

って行くのを見とどけ東の方へと飛び去った。後に残った日本の戦闘機は煙をはいたB 29めがけて尚も銃撃を加え、これ以上攻撃を加える必要がないと思ったのか、飯岡の上空を勝ちほこったように二回旋回し東の空へと飛び去った。

煙をはいたB 29はぐんぐんと高度を下げ木津川の堤防を目標に着陸を試みようとして、低空飛行をしては断念し上空へ舞い上がり、再び玉水橋下流の砂原を目標に着陸しようと低空飛行を試みては断念し、遂に上空高く舞い上がった。私が飯岡村から遠ざかるに違いないと思っていると、機首を急に北方に急旋回し、内藤さんの屋根すれすれに突込むように低空飛行してきたのである。私は思わず危ない私の家が直撃されると腰をかめると、そのまま北へ飛んだ。わたしはああやれやれと思っていると再び南へ機首を向け急旋回し、再び内藤さんの屋根から私の屋根すれすれに北へ飛んだと思うと高度をぐんぐん上げ、木津川上空にさしかかった。すると間もなく落下傘がパツと開き一人の乗

員が青谷村の山林方向に落ちて行った。そしてまた落下傘が開き一人の乗員は草内村の渡し場方向に落ちて行った。B 29はこれ以上駄目だと思ったのか高度を斜めにぐんぐん下げ、木津川の砂原にそって落ちて行った。村人達はそれを見てB 29が落ちたと声を掛けながら、竹槍を持つ人、くわをかつぐ人達が木津川の堤防を、あるいは農道を突走ったのである。私も墜落した方向の草内村の渡し場あたりを目標に普賢寺川の堤を走った。すると青谷側の向う岸の砂原に機首を砂の中に突込み、尾翼を上にあげ煙をはいているB 29が見えた。そして何回か爆発が起こりその度に黒い煙と炎が空高く上がった。飛び降りた乗員は草内の渡し場より少し南あたりの堤めがけてふらりふわりと落下傘を操りながら降りて来た。村人達は遠巻きに警戒して見ていると乗員は観念したのか、平静で笑いさえ見せていた。すると田辺の方からジープが走って来て乗員を乗せ元の道へ帰って行った。

今四十数年前の光景を思い出すにつけ民族の如何を

問わず、戦争とい悲劇のために多くの方々が犠牲になられたことを思えば戦争は愚かであったと思わざるを得ない、この悲劇を再び繰り返すことのないよう平和が永遠に続くことを願ってやみません。

(草内在住)



戦争末期、人手不足から多くの学生が勤労奉仕に従事した。

銃後の守り

西村 修 (六)

「昭和十六年十二月八日、未明米英と戦闘状態に入れり」このニュースは、ちょうど小学校（田辺）の校庭で遊んでいる折、ふと教員室のラジオから流れたもので、一瞬、その時、飛び上って喜んだ記憶があります。子供時代よく戦争ごっこをしていた頃故、しかし異様な感動をおぼえたのも事実です（戦争は勝つか負けるかの二つに一つしかない）、それからというのは、真珠湾攻撃から毎日のように勝利のニュースが報道されてきました。いよいよ戦争が拡大され激しくなるにつれ軍国主義一色にぬりつぶされ、大政翼賛会が

生れ国家総動員令が発令されるに至る。上空には、B29の飛来で飛行雲を作って彼岸の方へと去っていく姿もその頃でした。ちょうど学校の生徒時代であった私は戦時体制下におかれていたので、軍事教練に明け暮れていました。鬼のような教官（配属将校）、教練教師の下、厳しい訓練が課せられていた。つらかった夜間行軍と厳冬の渡河作戦敢行、凍るような冷たい水の中（木津川）をけちらしてしかも銃を頭上に位置して向う岸にたどり着く、身体全体がびしょぬれ。戦場の兵士を思え、親兄弟が国のために尽していると激怒する教官、苦しみにあたえることを教えられた。府下中等学校秋期合同大演習にも参加しました。

昭和十九年ともなれば戦況は不利な状況となり学校も繰り上げ卒業の実施や勤労動員にかり出されるようになる。私達も学徒動員として祝園部隊（精華町）へ派遣、火薬詰めや木枠詰め作業を、又女性や老人ばかりとなった百姓への手伝い。田の草とりも、冬は湿田の暗拒排水作業に明け暮れたこともありました。学校

の勉強は省略され、英語（敵国語）は廃止されるとい
う銃後の守りは益々厳しさを増してきました。

昭和二十年になると私の兄三人とも兵隊にとられ留守を助けるために農業を手伝っていました。老いた親といっしょに田畑を耕すようになったのです。食糧不足も深刻になって毎日のように都会からの買い出し婦人が畑に忍び込んで芋などを買いあさり、衣類その他との物々交換。警察の目をくぐって帰途につく背中に背負った荷物、「女は強い」この時につくづくと感じさせられた。食い物には必死だと感じた。また一方経済面では統制経済下におかれ、生活用品は配給制度へと移行、酒タバコは、お祝いごとになると特配をうけるようで、強権発動あり、厳しい米の供出制度が強いれられてきた。召集令状（赤紙）は毎日のように出征兵士を見送る姿も日課のようになってきた。逆に日増しに戦死者の公報や遺骨の迎えがawatadしくなる。本土決戦が叫ばれる頃、B29は毎日のように悠々と飛んでくる。その間隙をぬって艦載機は無差別に機銃

掃射をあげせ、大久保飛行場を集中攻撃が目の前で行なわれてくる。JR田辺駅や、河原の民家への機銃掃射も再三にわたり恐怖におそわれた。そうしたことから本土決戦ムードも益々高まってきたのは徴兵検査の適令年令に達しない人や、兵隊に採用されない中年を対象に郷土防衛隊が組織され、私もその一員に加えられたのです（宇治田原、井手、田辺、八幡の各町で構成）、訓練は実戦型の対戦車戦法と竹槍（銃の代用品）での毎日を田辺小学校の運動場で、一等兵（陸軍）の階級をもらって激しく厳しい教育が施された。全員が帰宅を許されることがなく集団活動を強いれた。食事はツブし麦とじゃが芋の混ぜご飯が主体で私など胃腸の弱い者は苦しい日常生活でした。

私は最近、鹿児島県の知覚へ陸軍特別攻撃隊基地と「鹿屋（海軍神風特攻隊基地）を訪れ学徒出陣や十七歳前後の少年が喜んで死んでいったが改めて戦争遂行の手段に過ぎなかったと思えば残念です。多くの戦争犠牲者の方々に対し黙とうをささげご冥福をお祈り申し

上げます。今日の平和があるのも戦争のために尽くした人々の上に成り立っていることを思えば、真の平和がいかに大切かを教えられたと思います。世界平和のために頑張ろう！

（河原在住）

徴用船員の戦争体験記

中野 正満 (七)

右四十五度雷跡面舵一杯

この体験記は四十五年を経ておりますので日時等は忘れており失礼ながら御容赦下さい。

私は昭和十一年四月に商船学校航海科の全科を卒業、海技免状を取得後、昭和二十二年まで商船士官として勤務しました。大東亜戦争の開戦は海南島で鉄鉱石を満載し、出港待ちの十二月六日ラジオニュースで知りました。

私達船員の身柄は昭和十七年五月二十二日に戦時海運管理令第十八条の規定により徴用（徴用番号―門徴

乗船）

当時の航海の状況は、内地―台湾間は御用船の船団がある時はその船団に加えて貰って航海相互間の距離間隔は二百m―三百m時には百―二百台湾から海南島間は単独航海。船団の無い時は往航内地―南西諸島扱い―台湾―直行―海南島復航は海南島―直航―台湾―支那沿岸沿い北上、上海沖から朝鮮南岸經由―内地。

会社船で支那沿岸を北上中沖合航行中のジャンク船（支那の帆船）の陰から発射された敵潜の魚雷により船と船員が海の藻屑と消えたことがありました。単独航海中は見張を倍増し夜間は厳重な灯火管制で室内は蒸し風呂、煙突の煙は極力薄く肉眼と心眼に頼って航海します。（心眼は水平線の影まで見えます）針の延の上を歩くとはこのことです。

では雷撃による沈没から救出されるまでの状況に移ります。

昭和十九年九月〇日門司港で南方派遣の陸軍兵〇名と軍需物資会社用物資を搭載（兵と軍需物資も運賃輸

第二五二号）これでしたが、戦時中船は陸海軍の御用船にはなりませんので軍属としての経歴はありません。体験記記載中の船は「ぼとぼは九五五四総屯」の新造船で職務は一等運転士（現行の二等航海士）でした。

船は沈没するまで八幡港と海南島間を鉄鉱石の輸送に従事していました。

民間船で徴用船員が如何なる戦争体験をしたかその一部である昭和十九年九月二十七日敵潜水艦の魚雷攻撃を受け沈没し、その後救出されるまでを記憶を辿って書いてみます。

配給物資は船員としての配給で、陸上より少し良かったと思います。航海は前記のとおり八幡―台湾經由―海南島往復で単独航海が多かったので対潜水艦用として船尾甲板上に砲（口径は忘れましたが）対飛行用として船橋上甲板に二十五ミリ機銃一門があり、これを作する海軍の兵三名が乗船しておりました。（兵は最初の内は内地―台湾間危険になった十八年末頃より常時

送―御用船でないから）船団を編成して六連島沖を出港、南西諸島沿いに南下〇日無事に台湾基隆港に到着、そこで食糧水等を搭載二泊後船団を再編成してフィリッピンマニラ向け出港、当時の船団編成は七隻で二列縦隊各船間の距離間隔は200m―300mバシー海峡を一路南下戦況は一段と悪化して来たので、ルソン島北端に到着するまで昼夜連続文字運動航行でした。（これは敵潜の攻撃を避けるため）。

九月二十六日朝ルソン島最北端アパリ沖に到着しました。これからマニラまでのルソン島沿岸は最危険海域との情報によりアパリで全船各船のボートで兵員とその食糧を上陸せしめました各船作業終了時を期して船団は抜錨夕方隣のバンギ湾に到着仮泊しました。この湾は沖合に向って何の防衛も出来ないもので二十七日早朝全船抜錨船団を編成して沿岸沿いに一路マニラ向け航行を開始しました。その時の船団の隊形は上空に警戒機十三機飛行中当日の正午中船橋の見張員が魚雷発射時に出来る水面の脹らみを発見して「右四十五度

魚雷と報告引き続き雷跡発見と報告があったので当直士官は直ちに面舵一杯（ハードスターボード）全速令しました。船が右に回頭中に三本の雷跡が見えた。

船首が約30度右に回頭した時に前の雷跡と二番目の雷跡は白く見え船首前方を通過しました。一番右側の魚雷が四番船艙で爆発しましたが、積荷が粘土であり本船は新造で外板も隔壁も普通より厚かったので沈没は免れて浮いておりました。約一時間かそれ以上過ぎた頃4番船が現場に帰って来て曳航救助作業が始まり本船を陸岸に向って曳航を始めました。（本船からもマニラまで曳航は不可途中で沈没と両船とも第2の被雷の危険があるので要請による）三時頃バンギー湾の岸近くで本船の船尾が海底についたので曳航を打ち切り四番船は任務に復帰しました。（本船と乗組は残したまま）。

本船は錨を下し、乗組員全員集合協議の結果食糧寝具衣類（必要だけ）を持ってボートで上陸し露営覚悟で救助を待つことにしました。（船が完全に沈没するま

でに必要物資は順次陸上に持って上ることにした）。

上陸した日は海岸の砂の上に毛布一枚敷いて寝ましたが、直射日光で焼けた水は熱くて眠れませんでした。が、夜半頃より沖から吹く風は涼しいが砂は冷え切って寒くてまたまた眠れません。

これから救出されるまで約一ヶ月露草と寝食することになりますが、幸い近くに空校舎がありましたので、その二教室で雨露を凌ぐことにしました。近くに陸軍の駐屯部隊約二十名程おりましたので救出方を依頼しましたが、私達は軍属でありませんので、梨の礫で何の応答もありませんが、警乗していた水兵さん三名は早急に引きとられました。悲しいかなみなし子の徴用船員であります。船橋上の二十五ミリ機銃も分解して陸に上げ海岸に沖からの攻撃に備えましたがこれも駐屯兵に持ってゆかれました。残されたのは料理用包丁のみ持った私達です。食事は船から上げてきた米を鍋で朝は粥一杯夕は握り飯一個副食物は汁（味噌のあ

一番船艙から揚げて来た缶詰（軍需品中手紙と自転車は駐屯隊に渡しました）。

いよいよ副食が欠乏すると海岸で小カニを取る、土着人の飼犬まで食べました。腰には何時もかん詰め

の空缶（茶碗の代り）ひもでくくった竹箸がぶら下がっておりました。仮寝中船では一等運転士（私）が医師の代りも務めておりましたので、その薬品で土着の人の傷や腹痛を治してやり、夜食のゴチソウにあずかったことも、差入れを受けた事もありました。（差入れ

物品は共有物です。（船員は上下とも皆一つ家族で団結している良き習慣が培れております）。

一か月過ぎた頃にマニラより機帆船が救出にきましたので、全員野営生活に別れを告げてマニラに向い会社の社員寮や社宅で引き上げ船の順番が来るまで少しは楽な生活をしました。本記録はこれで終わります。

マニラから台湾經由内地に帰るまで雷撃で十二時間泳いで救われたこと、高雄大空襲の生活は次回に書きます。

（薪 在住）

姿なき戦い

村井 博(七五)

「諜者は語らず」という鉄則を顧みず、この情報化の時代に少しでも参考になればと万感の思いを秘めて後世への遺言として「姿なき戦い」の一端を述べたいと思います。

私の卒業したスパイ専門の陸軍中野学校では戦術、諜報、偽騙(変装など)、爆破、忍法、語学、護身術、薬物、暗号等を習いましたが、教育の基本は「至誠」であり、大楠公を心の拠り所とし一切の名利を離れ「縁の下(ちからもち)の力持」に甘んずる教育を叩きこまれました。かくて昭和十三年、開校から終戦まで二千二百六十三名

戦意を諜知するよう指示がありました。そこで駐日外国公館員の家族の本国への引き揚げ状況、引き揚げ船における隠しマイクによる談話の盗聴、郵便物の開封、電話の盗聴、暗号の解読等昼夜兼行の日が続きました。駐日外国公館の暗号書はほとんどその盗写に成功しました。命がけのチームワークの賜物です。

昭和十七年六月五日のミッドウェー敗戦の時、ソ連の進攻を大本営は心配していたのですが、その時、私は日魯漁業株式会社の社員になりました。駐日ソ連出先機関の動静をうかがっていました所、モスクワからやって来た伝書使の態度が本国が「累卵(るいらん)の危きにある」ことを反影しており、その他の情報と総合判断し、「ソ連動かず」と大本営へ報告しました。これがヒットニュースとして最高に評価され、我ながら驚き、かつ恐縮した次第でした。

一方国民に対する取締りも峻烈を極め、反戦的、傍観的な要人たちが軽井沢などで密会していたのを床下に潜入し情報を取得していました。これを上司に報告

の秘密戦士が各方面に送り出されたのであります。私は卒業後、「軍事資料部」(昭和十五年新宿区若松町に設立)に入所、我が国に対するスパイ網を察知する任務に就きました。秘密兵器を作っていた登戸研究所や暗号の解読、信書の開封、通信の盗聴などやっていた陸軍特殊情報部と密に連絡をとっていました。この組織は徹底した縦割りで、相互遮断のため終戦までお互いに他の業務内容はわからずじまいでした。あの有名な「国際諜報団ゾルゲ事件」についてですが、ゾルゲをはじめブーケリッチやクラウゼンやアンナ、クラウゼン及びそれらとの接触者などかなり突っこんだ情報をキャッチし、動かぬ証拠をも入手し、それを資料部本部長を兼務(この兼務は昭和十八年解除)していた憲兵司令官にそっくり移管しましたので、資料部は永遠に縁の下(ちからもち)の力持に終わっています。開戦前の我が国は世をあげて親独熱にうかされ、「独逸のバスに乗り遅れるな」という形勢であり、敵性国家であった米英蘭等との関係はとみに險悪となって参りましたので、その

すると、これらの要人は二等兵で召集され、玉碎予定地へ送られるという死刑的懲罰処置がとられるので、私はすべて手元で握り潰しました。「これらの要人も国を愛する心には変りはないのだ」と信念で行った我が行為に正しいささかの悔いもなく、むしろ誇りを秘めています。

最後に姿なき戦士の教訓を要約しますと、最も大切な資質は一切の名利を捨て、功を他に譲り、あらゆる拷問にも耐えて累を他に及ぼさず、静かに死んで行く覚悟がないと秘密戦士になれません。戦時中他の者の責任も引き被り自殺用のピストルを恭しく頂き自決した戦士も数多くありました。次に諜報のコツは「先ず近寄れ」です。偵察衛星に頼り過ぎず「足」を以ってかせぐことが大切であります。そして対象について十二分の基礎知識を持つことです。

ミッドウェーの敗戦とガダルカナル撤退を転機として日米は攻守その所を異にし、弱者の戦法たる遊撃戦の展開の必要が生じ、私も昭和十八年十月にラバール

へ転出、第七遊撃隊で高砂義勇兵を混成し、敵中深く敵諜報機関掃討の遊撃戦に当りました。

見守る人もなく異国の土と化した同志、壮烈に花と散った戦友、切々と肉親を思い絞首台に上った戦犯者のことを思うと、「平和」へのさらなる熱願に燃ゆる次第です。

(三山木在住)

私の戦中、戦後

木口 淑 好 (五)

語り継ぐ戦争体験

終戦間際の昭和二十年私は五歳、兄は小学生で学童疎開で叔父の家(大住)に、弟は二歳であった。父は海軍将校でお国のために、ご奉公の真最中。当時私の家は岩国基地のすぐ近くに居していた。来る日も来る日も爆音が轟き、その恐ろしさにおびえていた。防空頭巾をかた時も離さず、いつでも防空壕に入れる状態だった。空襲警報が鳴りその壕に入り身を縮めていたこと、その間に爆撃があり疎開のために荷造りしていたコオリを爆弾がつき抜けていたこと、そして父の戦死の報、私は何もわからなかったが、母は今後如何に

生きるかで涙も出なかったと言う。その日からどれほどの日々が過ぎていたのだろう。戦死した筈の父が帰って来た。母の喜びと驚きは今まで見せることのなかった涙に変わった後になって聞いた。その夜、父に抱かれて見た光景が今だに目に焼きついている。基地で飛行機が燃やされ、炎と煙が天までもときそうであったことが――

私の戦後はその日から始った。食糧難、就職、結婚、主人の突然死、子供のこと……大きな山、川が幾度となく波となつて押しよせて来た。上を見ればキリがない。今は静かに戦後をふり返り自分を楽しんで生活している。でも父(八十四歳)の戦後はまだ終わっていない気がする。戦争で目と耳に障害を起こし、両眼は右半分が見えないし補聴機をつけていても大声を出さないと聞こえない。この新年正月三日に父と二人で酒屋神社を経て普賢寺の大御堂までの往復を約三時間かけて歩いた。健康な父であるがその時父は「目と耳が普通の人のようでありたい」と声をふるわせて言った。

戦争がいけないのだ、戦争が父の目と耳を奪ってしまったのだ。私は戦争を憎む。そんな父に何もしてあげることが出来ないが、保養を兼ね年に十回近くの両親二人の旅行が長く続くように陰でソツと支えて行きたい。私達子供のために必死に生きて末た父の戦後が「幸せ」と感じることが出来るように。

(大住在住)

悲惨な戦争への荷担

沖山 恒夫 (七三)

私も支那事変、第二次大戦中、兵として第一線の戦争体験も味わいました。こんな体験は多くの人が綴り語り継がれるでしょう。

田辺町が戦争体験文集を募集されるに当り、特に田辺町にあった体験を記することにした。私は二回に亘り戦場にいた期間を除き国鉄片町線田辺駅に勤務していた。周知の通り現精華町地内に陸軍の弾薬庫が建設され輸送用の専用線(引込線)まで敷設されて、この弾薬の鉄道輸送を田辺駅が所轄担当することになった。庫内の設備進捗と戦争の拡大が併行し連日弾薬の

戦地到達のため港湾への列車輸送が頻度を増していった。大阪港へ神戸港へ呉港へ門司港へと送り出されていったのである。多い日には一昼夜十五屯積貨車九十輦ほど送り出された。しかも鉄道輸送、港湾荷役、兵員移動、輸送船舶、揚陸等々作戦に一貫したものであり、私等の鉄道輸送も軍と上部の命により絶対正確を要求された。ある深夜、弾薬庫(祝園部隊)内で貨車の入換作業を行い発送牽引すべき貨車三十輦を集結したときはすでに発車時刻を過ぎようとしていた。発車時刻にはかり気を取られ線路最奥部に留置していた一輦を連結しないまま引込線より駅まで戻って確認すると一輦足らない、時間的に如何ともし難く大阪港の停車場司令部に連絡一輦不足のまま貨物列車を発車させた。翌朝初列車で実状開陳に司令部に出頭「作戦に支障を来たす」と大目玉を頂戴で済んだのも偶々次の日も同数の輸送があり前日分の一輦を附加して発送できるためであった。この貨車一輦分の弾薬が戦況を左右する量であったかもしれない。こんな失態は希で

あって田辺駅は全国で数ある弾薬の一つの輸送基地として私等は戦場への輜重隊の任務を担っているとの誇りを感じていた。

残存弾薬も少なくなったであろう頃の昭和二十年敗戦となり、やがて祝園部隊も米軍に接収されその第六三六火薬廠に変身した。そして横須賀港に揚陸された弾薬砲弾が本廠に収納貯蔵されることになり、戦後は戦中とは逆の到着収納輸送が米軍警乗兵士の銃口に晒されながら連日続いた。六三六火薬廠への到着も小康状態となった頃朝鮮戦争が勃発し収納貯蔵された砲弾、弾薬が朝鮮戦線へ補給のため戦中と同じ列車輸送が再び連日不眠不休で開始され六三六火薬廠の米兵員も多数朝鮮戦線へと移動した。朝鮮戦争中はその激しさを物語るかのように砲弾の薬莖が送り返されこれの収容輸送も続いた。

戦争の悲惨さは得てして敗戦国のみが感じるもののように考えられがちであるが戦争である以上戦勝国も同じである。顧りみれば私等の戦場へと輸送した弾薬

砲弾は敵対国の多くの人間を殺戮し、財産や自然を破壊したことであろうか。私等は長年に亘り知らぬ間に悲惨な戦争の殺戮材料輸送でそれに荷担してしまっていたのである。国鉄は輸送の重大な使命を担っており、また講和を忠実に履行する尖端の国鉄の職員であったがために戦争への荷担者になってしまったのである。

そしてその殺戮資材輸送の基地が、我が田辺町内の今姿を変えたJR田辺駅であつことも風化しようとしている。悲惨な戦争後四十余年溢れるような平和の今日再び弾薬輸送はしないと足を洗い田辺駅東側に鎮座する蒸気機関車こそ小さいが戦争中弾薬輸送に活躍したCIJ型の勇姿である。更に六三六火薬廠が我自衛隊に引継がれて関西文化学術研究都市の中央に厳存する。歴史は繰返さないだろうか。職務に忠実であつたが故に悲惨な戦争の殺戮材料輸送で戦争に荷担したことが何となく後目痛い感じと淡い誇りが交錯してくる。

(新 在住)

腰が抜けた

西川 滋 (六五)

昭和二十年(一九四五)三月十六日、晴、友人の東重雄君と大阪市の大正橋のたもとで昼食の弁当を開く場所を探していた。

当時、私は大阪府立城東工業学校機械科の五年生で、十八歳、昭和十七年(一九四二)より、陸軍の大阪造兵廠技術課工場に学徒動員で動員され、機械の修理や珍しい機械(含兵器)の解体などの仕事をしていた。

三月十日未明に、アメリカ軍の四発の超長距離重爆撃機B29三百機により東京が爆撃され、死者八万人以上、重軽傷者十一万人以上、全焼は約二十六万戸、罹

災者百万人、都心の約四十二平方キロメートルを焼きつくす被害を受けた(終戦後に知ったこと)。三月十二日に名古屋が空襲され、三月十四日に大阪がB29の焼夷弾の猛撃で十三万戸が消失した。

私と東君は、この一月から、町工場へ文書を持参したり、持ち帰る仕事を命じられ、毎日大阪の町工場回りをしていた。仕事の中味は『軍の機密』ということでは知らされず、二人はただ忠実に文書の配布と、返書の受け届けをしていた。空襲が夜間であつたために直接の被害を受けることがなかった。

国鉄田辺駅から四條畷までは汽車、ここで電車に乗り換え片町へ向かう。野崎を過ぎ住道辺りに来ると焼け跡独特のにおいがする。京橋で乗り換え、城東線の森の宮で下車、動員先の修理工場に入る。

昨日までは、国鉄や市電または自転車で回った工場だが、焼け野原になった大阪の工場回りは、今日から徒歩以外に方法はなかった。上本町筋から谷町筋へ西下する。まだ煙が立っている。その中に焼け残ってい

るのは電柱・土蔵・墓石が重なもので、木造建築は灰と炭になり、この世の地獄絵さながらの眺めであった。栗田鉄工株式会社に寄り大正橋のもとに來たら登になった。どこを見ても黒い炭と灰の世界、大きな石があったので二人は弁当の紙を敷き、昼食をとった。食後その石の上に乗ったら、石が『ふあ／＼、ふあ／＼』とへこむ、『どん／＼』と飛び上がった大きくへこむ、よく見たらそれは焼死した馬の胴体であった。

食後、二人は南海電車の起点である難波に向かった。難波の南西に専売公社のタバコ製造工場（戦後ここは南海フォークスの本拠地大阪球場になった）があり、れんがの壁だけが古い城壁のように焼け残っていた。複々複線の長い難波駅南の地下道を西から東へ通り抜けようと、東君と歩いて行くと、真っ黒に焼けたマネキン人形が山のように積み重ねられていた。高島屋百貨店が空襲で焼け、その店のマネキン人形が焼けてここに運ばれたものと考えた。実に黒く全体がはち切れるように膨れ上がっていた。そつとさわると柔らか

い、そして腹部が破裂しそこから腸がはみ出している。それはマネキン人形ではなく、空襲で焼死した人々が集められた山であった。とたんに足が動かなくなった、気はしっかりしているのに足が動かない。「おーい東、助けてくれ、足が動かひん」東君に肩を借りここを通り抜けた。

造兵廠に帰り、今日の返書を渡した。当時、廠長は相馬中将で、修理工場の担当は巽大尉、その技術課に鶴澤技官が仕事をしていた。鶴澤さんは私達に、

「学生、（実際は生徒）そんなに仕事せんでもよい、十八史略を教えたるさかい、こつちへおいで」

といって、十八史略の話をよく聞かせてくれた。話が面白いのでついこの話に聞きほれたが、日本がアメリカやイギリスに負けるとは考えていなかった。

（薪 在住）

昭和天皇を想う

鶏 内 ヨシ子（七）

昭和二十年八月六日、広島で原子爆弾破烈。八月九日長崎へ又投下。何方という人が一時に死亡。もう日本は駄目だ、全滅かと打撃をうけた。

八月十五日、忍び難きを忍びと陛下の御英断で終戦となりました。口には出しませんが、これで夫は帰れると安堵の胸をさすりました。嬉しくて嬉しくて夜もねむれません。となりの中尉の奥さんは、終戦になったことをさかんに憤慨されていたが、元気で帰っていた中尉さんは一か月後、高熱にあえぎ、血をはいで一週間苦しんで亡くなりました。原子爆弾

にあわれていたのです。お気の毒でございました。待ちに待った主人は、十九年十一月十日グアム島において戦死云々の公報が二十一年秋にありました。

昭和天皇の御製

「身はいかになるともいくさどめけり

ただたふれゆく民をおもひて」

大御心で終戦の御聖断によつて本土決戦という災厄をまぬがれ、平和が回復致しました。

あの恐ろしい戦争が終った。本当に有難く助ったと、感激し天皇陛下の元にいるということがどんなに有難く思えたことでしょう。涙、涙です。戦死者遺家族になりましたけれども終戦！！

日本人の食糧がもう三日分しかないという、二十年九月二十七日天皇陛下は占領軍総司令官マッカーサー元帥を訪問なさいました。時間を公式にマ元帥に通告されていました。第一次世界大戦の終った時、ドイツのカイゼルが自分自身の安全と皇帝の財産を衛つてもらおうと頼みに來たということを思い出し、敗戦国

の日本の王様もドイツのカイゼルと同じことと思い、服装を正して訪問なさった天皇に対してワイシャツ一枚で……馬鹿にして……天皇様が右手を伸べて儀礼の握手をなさろうとなさっても元帥はこれに答えなかった。

天皇陛下は重々しい語調でこう言われた。「あの戦争は私は重大な責任を感じている。皆私の責任だ、戦争責任を問われるなら私を処刑して頂きたい」元帥は自分の耳を疑った。

「宣戦布告の詔勅」が起草されたときには、天皇はそれをお読みになって「朕は戦争に反対である。けれども共事情止むを得ざるためにこの詔勅に御璽を押すから一句書き加えてくれ」と仰せられてあの宣戦の詔勅には「洵ニ己ムヲ得ザルモノアリ豈朕力志ナラムヤ」とはつきり天皇の御意志でないことが明記されてあるのがあります。天皇さまはあらかじめ持つて行っておられた、大きな風呂敷包みを机の上に置かれて

「ここに皇室所有の全財産の登記書類の全てでござ

います。私は命もいらぬし財産もいらぬんです。国民が可愛そうです。今や国民は食糧に飢えているんですからここに皇室所有の全財産を指令部へお引渡ししますから何とか国民に食糧を補給してやって下さい」元帥は本当にびっくりした。元帥は天皇陛下の手を両手で握って「陛下」と感動の叫びで言ったわけであつた。

お帰りの時は元帥みずから天皇を玄関まで送って出られた。その後天皇陛下はマ元帥を数回訪問せられたが、その訪問を受け対話を交す度、マ元帥は天皇陛下の御人格に対する尊敬心が高まり最後の訪問を受けた時は大礼服を着て天皇の御訪問におこたえたのであつた。

天皇陛下はこの会談を他言せずと元帥に頼み約束なさつたのに、昭和三十年渡米した重光葵氏がマッカーサー元帥との会談の模様を聞き、読売新聞三十年九月十四日付にのせています。

天皇陛下の無私のご行動は、民族や国家のちがいを

こえて強く心を打ったのでした。

天皇陛下の御徳は日本人だけでなく全世界の人の心をうごかすのだ、ということを実感いたしました。天皇国日本とは、このような天皇陛下のみ心を国民一人一人が自分の心とすることであり、これが実現した時毎日毎日新聞を埋め尽くすニュース、テレビの伝えるニュースは起こらないのではないのでしょうか。

(大住ヶ丘在住)

軍国少年と二人の師

芦田 鐵雄 (六三)

四月から河内長野市にある短大に出講することになり、打合せのため二月の初め南海電鉄高野線の千代田駅におりたつた。四十七年ぶりのことである。金剛山の稜線だけが昔のまま。余りの変りように息をのむ思ひだった。所用をすませ、足の不自由な私のため車で駅まで送ってくれる教務の職員に無理をいって、国立大阪南病院へ車を廻してもらった。なだらかな下り勾配の坂道の向こうに病院の門が見えた瞬間、病院の敷地にあった大阪陸軍幼年学校に入学するため、母（父は応召中）と二人でこの坂道を歩いた情景が、変りは

てた周囲の風景とはかわりなく、映画のカットバックのように鮮烈に蘇ってきた。一九四五年四月、四十七年前のことである。

私は府下福知山で一九三〇年に生まれた。福知山といえは歩兵二十連隊。田宮虎彦の小説『異母兄弟』に出てくる軍人の町である。軍歌を子守唄に育った私は、中学二年を終えると当然のこととして職業軍人の養成機関である陸軍幼年学校へ進んだ。出発にあたり私の最も尊敬していたM先生宅へ挨拶に伺うと、この先生海軍兵学校出身の海軍大尉、シベリア出兵の後退役し京大で歴史の勉強をやり直したとかいう変った人なのだが「今どき学問の出来るのは軍の学校しかない。仕方がないな」との一言が錢の言葉であった。

午前中は学科、午後は術科すなわち軍事訓練である。大阪はロシア語とフランス語の班があり、私はロシア語の方。このロシア語が週三時間のほか、数学、化学、生物、物理、国語、歴史とぎっしりつまっている。中学時代の同級生達が学業を捨てさせられ、軍需工場に

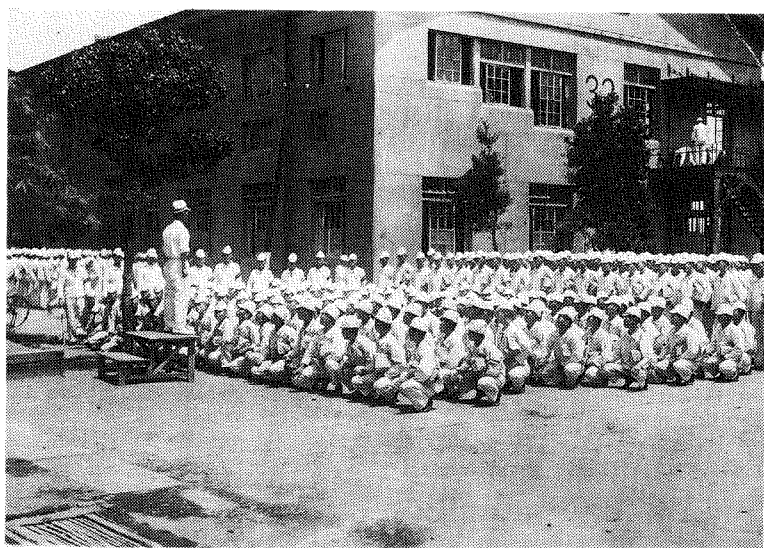
動員されて空きつ腹で働かされている時、私は一日五合の米の飯と週に一度甘味料と称して菓子まで支給される恵まれた状態で勉強に勤していたのである。一点の疑念も・う・し・ろ・め・た・さもなくである。皇統連綿たる現人神である天皇のため欣然として死地におもむくことこそ至誠の道と教えられ、軍の中核たらん将校生徒の自負に自己陶醉。外界とは一切遮断され、特室の一方通行の情報と、軍の教科書、教育法による徹底したエリート教育で純粹培養された十五歳の少年は、小・中学時代の素地もさることながら、僅か半年たらずのうちに見事に出来上ってしまったのである。

敗戦、中学校に復学。M先生は職業軍人であったため教職を追放され、「天皇制だけは謹持しなければ日本は亡ぶ」と絶叫の言葉を残して中学を去って行った。家に籠もったM先生は万葉集と国学の研究に没頭していた。その頃、五里霧中の私にとって画期的な人との出会いがあった。幼年学校で仲のよかった京都の友人を訪ねると、彼は或る家へ私を案内した。東山山麓の

静かなたたずまいの家だった。和服姿であらわれたのは、幼年学校へ敗戦直前教官不足のため配属されてきた学徒出陣の将校——将校でありながら、学生上りは軟弱だからと接触することを禁じられていた——その人だった。三方書棚にかこまれた部屋で彼は熱っぽく語った。丹波の田舎者の私には理解出来ぬ会話が友人との間で交わされる。大学へ戻り、一から学問のやり直しをしているという。何のための学問かを考えなければいけない。河上肇博士の著作を読み直しているのだ。君達、社会科学の勉強をしつかりやらなきゃ駄目だぞと繰返し語ったのを憶えている。三度目に訪ねた時、彼は行方不明、自殺したとの噂もあった。それから四年後、M先生は本居宣長の『玉勝間』を読みながら帰らぬ人となった。そして私は、この二人より齢を重ねてしまった。

これから週に一度千代田の駅に降りることになる。否でも応でも、六十二歳の私は十五歳の私と格闘しなければならなくなった。

（河原在住）



志願兵の朝の点呼風景